御返事が遅れました。色御宥恕。
淺野猫三郎先生に飛火いたし、鉄火の
ため二、三ほど境に参りました。その折お訪
すべく、途中まで参りましたけれども、仙田に
履を入れずと引き返しました。
御手紙は頂かずとも、仕て判って居りました。
ただ有り難うとのみ申上ます。
山田君が土曜日にお出で下さったことは、
随分つらい十字架でありました。無し。
それで一先づ風一過、大分青空が
見え初めました。当分晴れ続きと思
はれます。心より感謝します。流石は
山田鉄道君であります。一先乱なる
中分ながら。
次郎が太郎兄さんのコーヒー茶椀が欲
しくって、誰もゐない時に、そっと手に取って
見やうとして、うっかり下に落して、その取手
を破ってしまひました。次郎は泣きました。
なかし誰も来てくれませんでした。とりく仕方
なしに、そっと、糊で取手をつけて、知らん

顔で元の所に置きました。なかし、不安で、心配でたまりませんでした。お母さんにも兄さんにも会はせず、自分の部屋に引込んでをりました。そして、お母さんがお兄さんに、買い物の御用を頼まれたのを、珍らしく、自分の方でも頼まれて、兄さんの代りに使にまかけました。家にをるのが辛かったからでした。

途中で大勢の子供達が大ぶをやってをるのを見まして、御用も忘れて、立って眺めてをりました。すると一人の子の矢が外れて、隣の家の窓ガラスを壊しました。喜地悪な老人が棒切れを以て出て来ました。子供達は、ガラスを壊した当の子供と先頭に蜘蛛の子を散らす様に逃げて行きました。たゞ一人、やさしい、なかし、何処となく気品の備はった小供だけ、矢つきの石を持って、そこに立ってをりました。老人は、てつきり、この小供の仕業だと思って、思ふ存分棒切れで、なぐりとばしました。小供は身を上げて泣きました。なかし一言の弁解もしませんでした。

次郎はじっと赤を見て居りました。そして自分に帰りました。自分を何をしてゐるんだ。あのみい人の足を非道って棒でぶたれた。私い自分の足を人におっかぶせやうとして居る……彼は恥ずました。そして直きにお家に帰って、お母さんに在てをあゆけてお詫をしました。お母さんは大変と北んでその毀れた茶碗を下さいました。

皆さん、さっきの小供さんは誰でせう？……それは、それはエス様ぴす！」

こう言った、私の一番好きな日曜学校の話を思ひ出しました。

一体功成りて、萬骨枯る。

一将を人間と思へば奮慨しなくなります。

たゞし之をキリストと思へば、感謝であります。

神のみ知り給ひます。

柏木も、内村、塚本も、何も、蚊も、眼中より置く必要ありません。たゞ神のみと

MARUZEN

歩きませう。
私のクリスチャンに失望した人が真のクリスチャンでありませう。
申上げる迄い事は書きませんでした。
たゞし書かずともよろし解下さるものと信じます。
先健康を祈ります。
再びお目にかかる日を切望します。
私は私を最善に利用して下さることでせう。たゞ獣として従ひませう。
山田君には今暫らく御遠慮いたします。

十月四日　毎々

（東）

山田徳子様

MARUZEN